コロナ禍での学校図書館の取り組み

香蘭女学校　司書教諭
鈴木　めぐみ

＜抄　録＞
新型コロナウィルスの感染症対策のために休校を余儀なくされた。生徒の学びを止めないために，学校や図書館がどのような取り組みを行ってきたのかを「朝日けんさくくん」の活用事例にも触れながら述べる。

＜キーワード＞
学校図書館，オンラインデータベース，オンライン授業，進路指導，新型コロナウィルス

1　はじめに

本校は，1888年（明治21年）に英国国教会の伝道によって創立されたミッション系の中高一貫の女子校であり，キリスト教に基づく人格形成を目的とする人間教育を理念としている。同じ宗派の日本聖公会に属する立教大学の関係校推薦があり，卒業生約160人に対し，97人の推薦枠が設けられている。

歴史や伝統を大切にしながらも，変わりゆく社会状況に対応できる生徒を育てるために，早くからICTを活用した教育に力を入れてきた。学校内全域をカバーするWi-Fi環境，全教室に電子黒板やAppleTVが完備されている。2015年度からiPadを導入し，2019年度には生徒と教員全員が１人１台所有する環境が整った。現在は，中学入学時に購入してもらい，授業だけでなく，HRや部活動，校外活動といったさまざまな場面で活用されている。

このような下地があった上で，2020年２月27日の首相官邸で決定された一斉休校の要請を受けて，生徒の学びを止めないために，さまざまな取り組みを行ってきた。学校や図書館の取り組みに加えて，「朝日けんさくくん」を利用した進路指導の事例についてお伝えしたい。

2　コロナ禍での学校の取り組み

４月８日からZoomを用いた毎朝のHR，４月９日から個人面談とiTunesUによる配信授業を開始した。中等科１年生は，４月時点でまだiPadがなかったため，約１週間の準備期間を置き，自宅のPCやスマートフォン等で利用できるCYBER CAMPUSによる配信授業を行った。

iTunesUによる配信授業を基本としながら，授業によってはロイロノートやGoogleドライブ等の他のアプリも組み合わせて学びを進めてきた。配信授業の他にもネイティブの教員による英会話のレッスンや中等科生向けの洋書の読み聞かせがZoomで行われた。さらに，長引く休校中に少しでも息抜きとなるように各教員が考え，今だからこそ役に立つ知識や生活に彩りを与えられる授業を集めた特別教養講座が５月に設けられた。

本校では，学びの支援だけではなく，心の支援も重視してきた。ZoomでのHRや個人面談はその１つである。直接は会えないが，少しでも教員や友人の顔を見て会話をすることで，生徒たちは仲間がたくさんいることを実感したようである。さらに，「こころとからだの健康を保つために」というお便りの配信や，養護教諭やスクールカウンセラーとの面談（希望制）やサロンを実施した。

長く続いた休校であったが，６月から分散登校を行い，段階的に対面授業を始めた。現在は，通常通りの授業を行い，部活や委員会も再開され，日常を取り戻してきてはいるが，毎年開催してきたバザーが中止になるなど，コロナによる影響はおさまっていない。

3　コロナ禍での図書館の取り組み

図書館では翌日からの休校が決定した２月28日に，急遽，

写真１　本校図書館の様子

SUZUKI, Megumi：香蘭女学校（東京都品川区旗の台 6-22-21）

貸出冊数無制限での貸出を行った。とにかく少しでも生徒に資料を提供しようと模索することとなった。

３月半ばに，各出版社が作品を無料公開しているサイトや，契約しているジャパンナレッジLibとポプラディアネットの自宅利用についての案内をCYBER CAMPUSで全校生徒と教職員に配信した。その後も，手に入りやすい文庫の紹介や，おすすめのサイトを情報更新しながら何回も配信した。Web上で利用できる図書館の蔵書検索システムにも同じ内容を載せ，ブックリストを充実させて読書の手助けとなるようにした。

その他の読書支援として，Zoomによるオンライン読書会を中高に分かれて４月～５月に各３回（計６回）開催した。司書教諭による本の紹介や，図書館の様子を見せたり，参加者が今読んでいる本やお薦めの本について話をしたりなどの内容で実施した。特に中等科１年生は，入学してからずっと休校で図書館に入ったことがない生徒もいたため，図書館の様子を映した読書会は好評だった。

４月から配信授業が始まり，さらなる学習支援を行った。その中で２つの取り組みを紹介する。１つは，中等科３年生で執筆する卒業論文への支援である。通常は，４月後半に司書教諭が「論文とは何か」「テーマと問いの違い」「論文・レポートと作文・感想文の違い」「資料の探し方」をガイダンスで指導している。それに代わるものとして，iTunesUの中３卒業論文のコースに，上記の４つの内容を投稿し，生徒に受講してもらった。確認したいときに何度も見直すことができることは利点であった。さらに，コースにレファレンスを設け，そこでレファレンスや卒論の相談を受けられるようにした。このレファレンスは，分散登校で学校が再開された後も，図書館内の密を避けるために継続した。公共図書館の利用が制限され，書店への外出も難しい状況の中で，少しでも卒論を進める手助けとなったと考えている。

２つ目は，２章で触れた特別教養講座への投稿である。普段はなかなか教えることができない本の歴史についての講座を投稿した。パピルスや巻物などの実物を動画で見せながら歴史を説明した講座は，学校再開後に，受講した生徒から「普段は学べない内容を学べて面白かった」と感想をもらった。コロナの自粛期間で時間があったことで，生徒が普段は学べないことを学ぶ機会になったことはプラスとして考えたい。

この他にも中等科１年生に向けてGoogleドライブにあげた図書館のオリエンテーション動画を見てもらうなど，さまざまな取り組みを行った。

4　コロナ禍での「朝日けんさくくん」の活用事例

「朝日けんさくくん」は４月から自宅利用できるようになり，使い方を含めてすぐに生徒と教職員に配信した。

この配信を見て「朝日けんさくくん」の活用を決めたのが，高３の担任をしている英語科教諭であった。高３で立教大学を志望する生徒は，志望動機書の準備のため，各学部に関連した最新の時事問題を知る必要がある。また，秋の推薦入試や総合入試を受ける生徒は，学修計画書の提出を求められることが少なくない。これらを書くためには，入学してから何を勉強したいのかを明確にする必要がある。そのためには，学部の分野の知識や理解がないと難しい。理解の一歩として最適なのが，新聞である。休校中，学校や図書館は閉まり，新聞を購読していないご家庭もある中で，高３の担任教員が薦めたのが「朝日けんさくくん」の利用だった。

これ以外にも，クラスで生徒に学問的な観点からの新聞の切り抜きを呼び掛けてきた。実践している生徒のスクラップは，その生徒の考えの軌跡がよくわかるという。

新聞を読ませる課題を出しても，新聞を読みなれていない生徒は，どこを重点的に読めばよいのかわからない。そのような生徒のために，どんな記事を読めば理解が深まるのかを伝える必要があると考え，朝日新聞の「耕論」など，どこを特に読んでほしいのかを夏休みに高３教員から生徒に配信した。

高３以外にも中３の卒論等で活用されている。今年度はタイムリーな話題として新型コロナウィルスをテーマにしている生徒が複数名いたが，どんどん変わる状況の中で役に立ったのが新聞だった。司書教諭がレファレンスを受けて，「朝日けんさくくん」の利用が適切だと思う生徒に薦めた。これらの活用状況を受け，いつ休校になっても対応できるように今年度末まで自宅利用できる契約にしている。

5　おわりに

今回の休校で，学校図書館として何ができるかを考えるうちに「学校図書館とは何か」という問いに行きついた。「学校の教育課程の展開に寄与するとともに，児童又は生徒の健全な教養を育成することを目的として設けられる学校の設備」が学校図書館であるが，箱物としての学校図書館だけに目を向けるのではなく，今後はその機能を，場所を超えて提供できるように考えていかねばならない。

本校では，次年度から総合的な探究の時間が本格的に始まる。学校図書館は資料提供だけではなく，さまざまな場面で授業の支援をすることが一層求められるだろう。しかし，全ての授業を学校図書館で行えるわけではない。多種多様な資料が集まる学校図書館という場所の重要性は変わらないが，教室や自宅などの学校図書館外でもその機能を提供できるように模索していきたい。